[illegible]之集

天

特別
へ5
6148
1

抑誹諧ハ只識のあそひことにや
らてに月村雨邀月臺の遊子ハ
亭に親族の自ら行ふ上に風雅
の志同しうむつへきされて
此道の師恩まそくちらく此変り
の教學うゝん支をと忘れたるまて

彼芭子とよるも三師に雪月花
の発句を乞て ともしく独吟
三章とまうけ総総知己の佳句
とゆとめ文中五題の脇句にも
風窓の評をもとめ哉ハ文机
に埋るる附合の点俳諧二十
肯余宗道のほのめかしたる

一二とわけ壱千余く後来の
よしミとせんまりと江左の
隠士玉鈎菴の麻裡桃窓
の灯下にかきぬ

ウ

歌仙

杜子美か漫興けよふ　米仲

ちれの雲二月やかれく五六日

画比けり記も歳図の表　米徳

小ちり児の茶瓶とあくらん

汀涜攄も宣まける音

干きて舟ちりぬるさ忍るる萩の月

露の雫さは毛蓼犬蓼

漁蠖とお樸使てり揺るく

薩广の冨士とめく松風雲
素湯ちる皇衣又引く玉葛
炙もえ人烟 肌も羽二重
痩見り池会の笛と浚出れく
庄と早僕の運ふ咀水
泣顔や津高子吟ふ草鞋吟ふ
禮代ハ人の九里十里ほく
武の子も雨将氏の鉦太鼓
家 野追氏四 特の眠
月雪女 麿く彦根乃角 櫓

蒐盗人の蓑り鉄炮
軍中の掟嚴重飯田分
そのふしくも賤くの家
無ちく琴柱とろ力なき
無垢 濃さ 壞の張帽
云ほその叉り糯の后埋や
不可入と 護摩 蛇
柳子の生りむづと家主五人組
菜灌の猫沙 女郎八の芸麦
 錢丸鍵欲正面坊り阿陀佛む

ウ

音敲一聲雲切れの月
淋し庭は竹垣と萩から星
竹のもとりまんの鬼灯
芥子ほとぶ折とりてうつめきから
見んと墨子も紳書の井
牛の脊は眠りまあきて也漸ち濤
門松賣乃恵りの海まで江
其須も仁木山知りの花の春
蹟しらは自鶯の新

歌仙

湖十
扇裡

咲蓮と撞ちらかしく月見哉
脇に引しかも詩とらふ秋
酒舟り眉しかゝ跡を漕連て
飛立鷺の足と投おす
清ぶと黒く扇子の頭巾は白き
ちらわり 松の振と索す
戸かけて抱咲ふ童揺り取ぐ
浪ひ伏すもせましかき雪
撫りも彩く見ると戯然

源氏揺りみえ中りが燒臺
金沢の馬ハ急居とよく空く
長か細絶何紙挿ても
胡の月竹き蘇く居す雨の綴
扇子まされ家扇る袖座
きりくと秃のごとく煮ゝたれ
百萬通り鬼の一声
州島ハ遅くかんしゃる花盛
杉菜の青の老くらしさハ
其葡や奉公袖メり縄と索ゝ

醫者も玄関と見へ地好ヵ
古近江ハ雅ヵ弾ても其聲
ミやらの鑑夢見摂政
元服の盤氏井ゟ家親
飾侍の燭り人親氏神
能年て深おりし如百鶴叟
枝折嗅きし温ヵ水の因縁
何も無は傾と強く会ふ筆の坊
久しふりまてねむ三ヶ月
あやかれと賜りお襟の名と云へく

ウ

毛莨の花此猿くと咲
夜の明り薪の井筒横たえし
赤子と眉ふて気をりのと
鈍とらふするさに雁もなるもし
かい出りまて頬摺とする
一日の宿り見へし菩提寺
鶏ハ長閑り鳴いらくヵ

右三菓

權道画

歌僊

しら雪や杜舟のごとくまれまれと　紀逸

ひきゝも細き譲の撞おし　卄棠

渡ちかく疎く行鳥もおくれて

出花の無名り土蔵穿なる

空の月昇れは雲の跡きえて

おもひうけおきし桜せん川

ウ

鳴川と四五月出ると艸の露

白粉ほとはくれ世常丁

朔日や閑れ海ると知りたり

鰹一ねと然る星鰹る星
音遠涼しくはすい川ちやまて
大雨ありける寺の鳥口
鶏も勝の手川の野良へ知足
鬼灯賣のこれよ人の子
も川秋と耳へ来くるふ採蟬声
明移し家移身の水門
何用とかきる松乃緒編星
草へ居さし此日の風
波岸経佛の花も気絶と云テ

かし曲川く菜膳買窓
蝙蝠の灯と見るる八代く年札
さもは鎖りもあわく待避
掃出しそ第のえ糸おもひ維
鮎かう酒の白ふ物云イ
浮艸のあさく瀬も年礼市
鳥の中す宴の袂れ鳶
譯儘くとの須磨の横すい様
軒乃舟残十三里割り
夏の月擽賣氣しく只百兩

し所といふも　数ヶ所
飯と汁親り無へん　戴く
五節句とも年くかはらぬ昼
朝雲呈猫のまなもやけ家
まると大工の業と仕舞ん
神無和更くる事もひつくし
その月く此銘よねさし

畫讃

社苑篆

飯蛸や今を春べと這廻り

扇裡

英一蝶画

鰹〳〵はつま男の眉目かな

米德

英一蝶画

節季候を
馬よりて
静かに
眠らする

梅郎

寉一筆画

蒸生姜と焼や
囲爐小向の老
夫婦

蘭舟

寉一筆画

浪花　也足

竹廼ゑや
見るゆ梨
糸瓜垣

渡舟

英一蝶画

鳥林

窺子中
捲そひや刃の
まけ乃こゑ

英一蝶画

まし
はやし
蝶も
こぼれは
饒飯へ

米暁

英一蝶画

菜引笑子んを
とられけり

米風

英一蝶画

茸狩の
鰯もやいて
寝ぬ秋かな

蘭渓

墨一筆画

飯くへと
子にせかまるゝ
田植かな

甘棠

墨一筆画

敷島の
道手
遠ま風
蛙の飛し

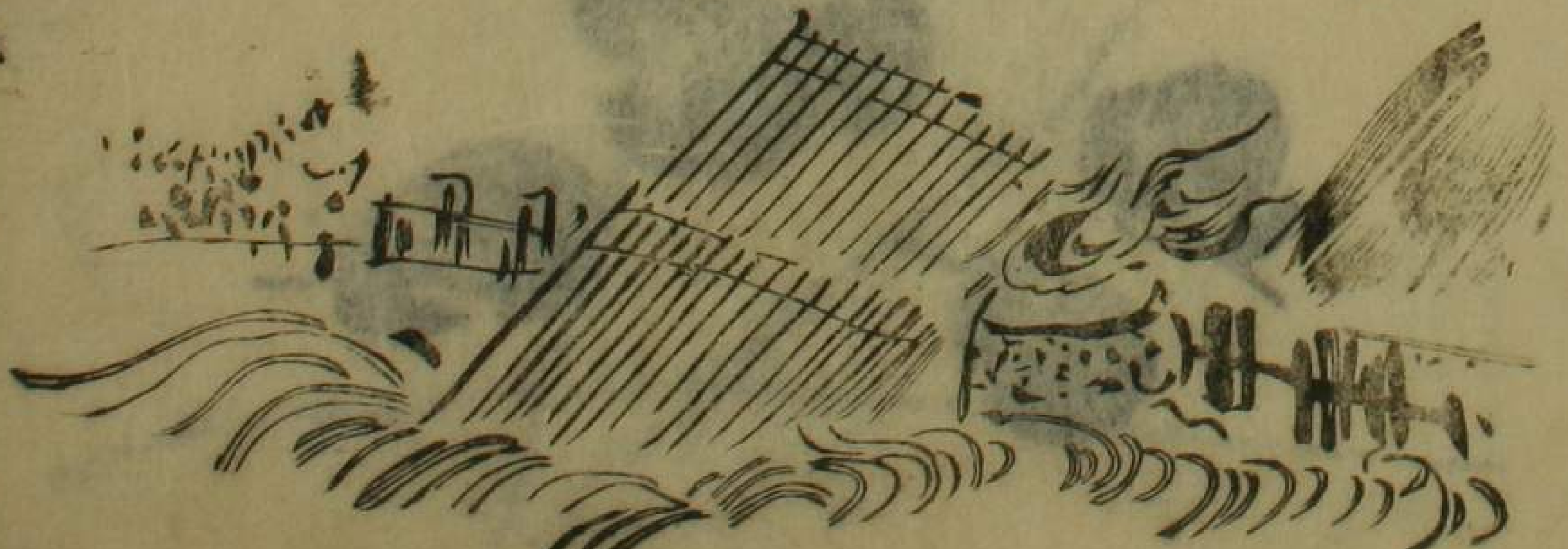
鸞臺

英一蝶画

蛤の
や張
にのふ気
あしろもり

潮十

英一蝶画



袖橋

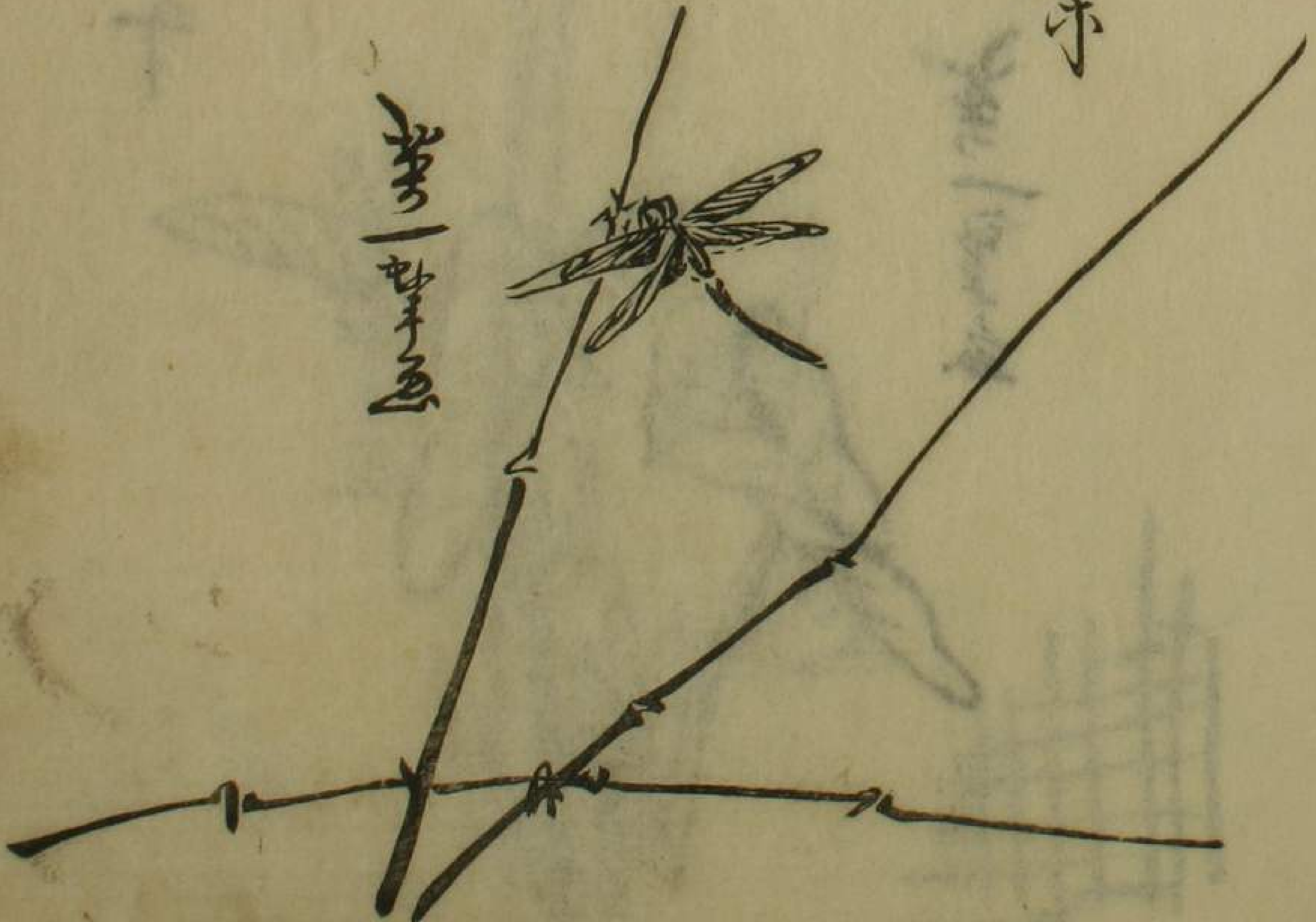
むらさきのゆかりもゆかし茄子かれ

蕙一筆画

百兼

蜻蛉や依む座頭の杖有あ利

蕙一筆画



黒ほこれ
濁て小
涼ぬ
根芋ハ

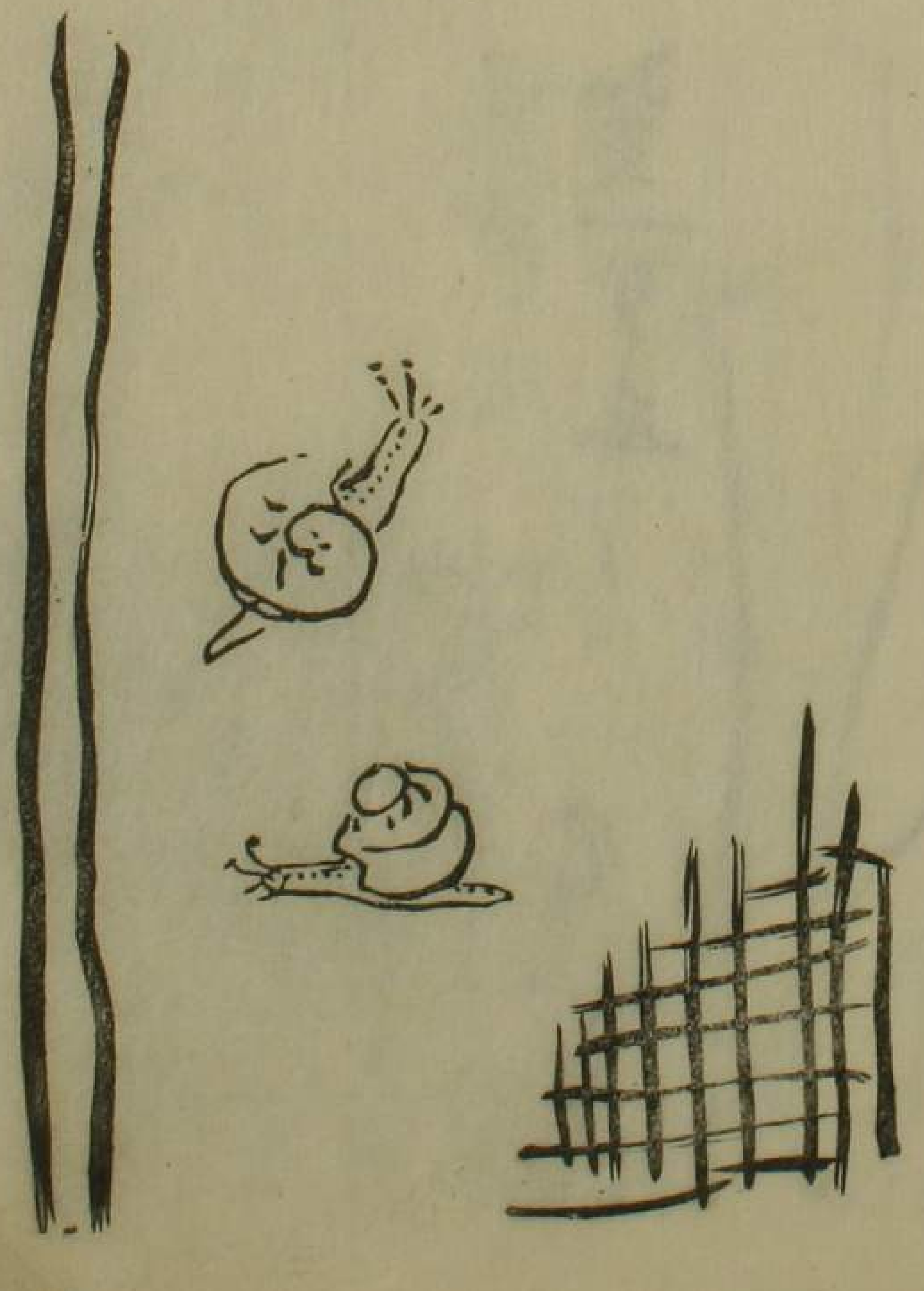
花千

葉一筆画

雨落乃磯
尓も似太
里蝸牛

扇裡

葉一筆画



蓮の華君子そ莫し花の池乃

不了

葉一筆画

青鷺や霧まて水に乃あさ花なし

長楙

葉一筆画

良わい坊
親子集の
炭竈や

陶巾

某一筆画

えへぬりしふ。
蝶のとまりて
と絡てん

了囲

某一筆画

足音尓
皆不爰堵
沈類田螺
乎南

東壁

葉一筆画

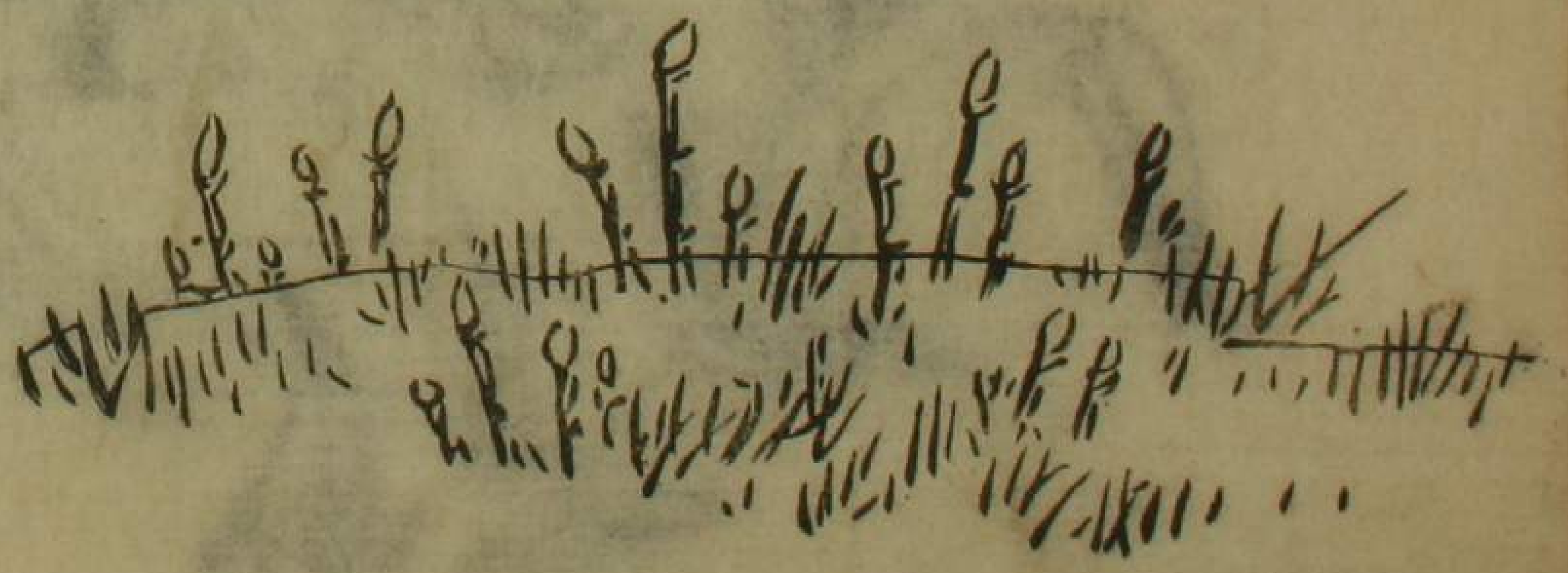
鬼ゆりみ
百合出ん
津ゐにして
山路哉

素石

葉一筆画

柳から
舟も
行ず
古く寛へ
花又茶利

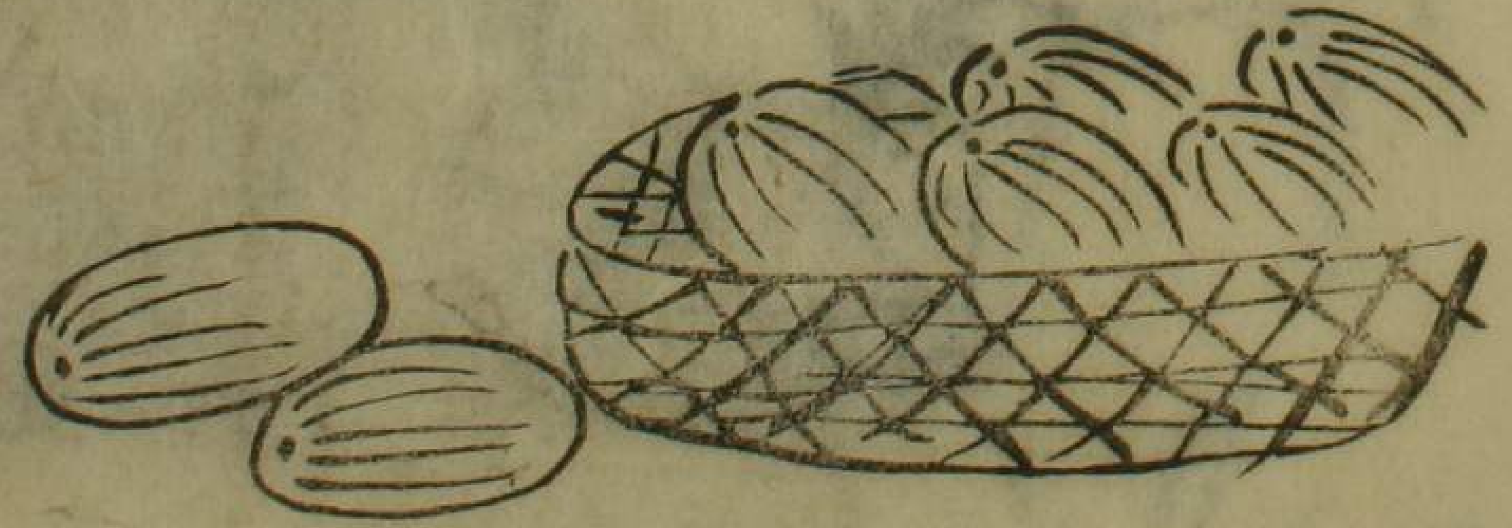
英一蝶画



ひゐの
い旨菊
や
や
星
真桑瓜
堂

杜谷

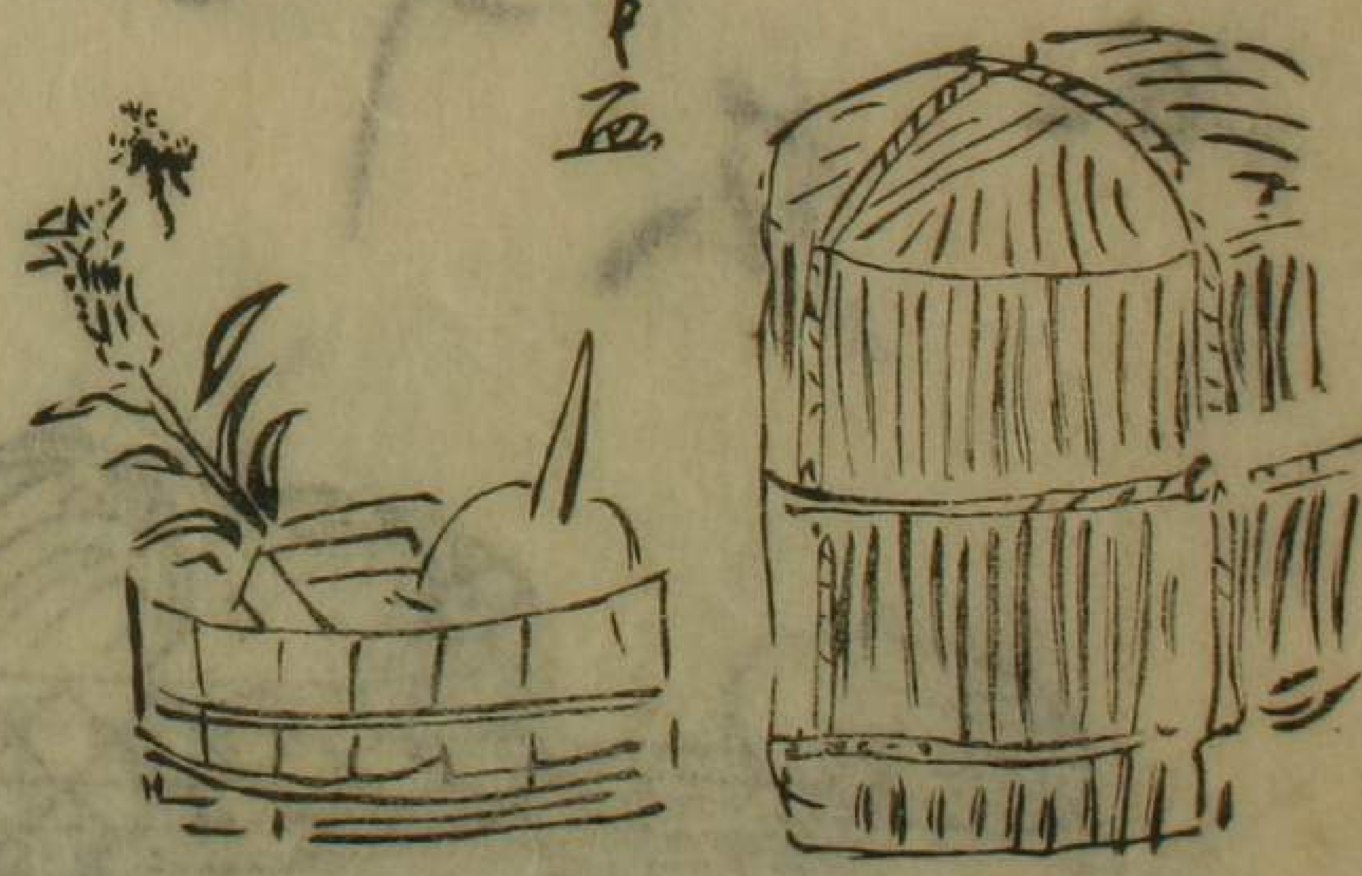
英一蝶画



社鼠

新の香も
鼻乃
あ津乃添
杉ぞ屋し

業一筆画



狗の背に
種蒔乃
泥を
洗ま色

業一筆画

烏狗

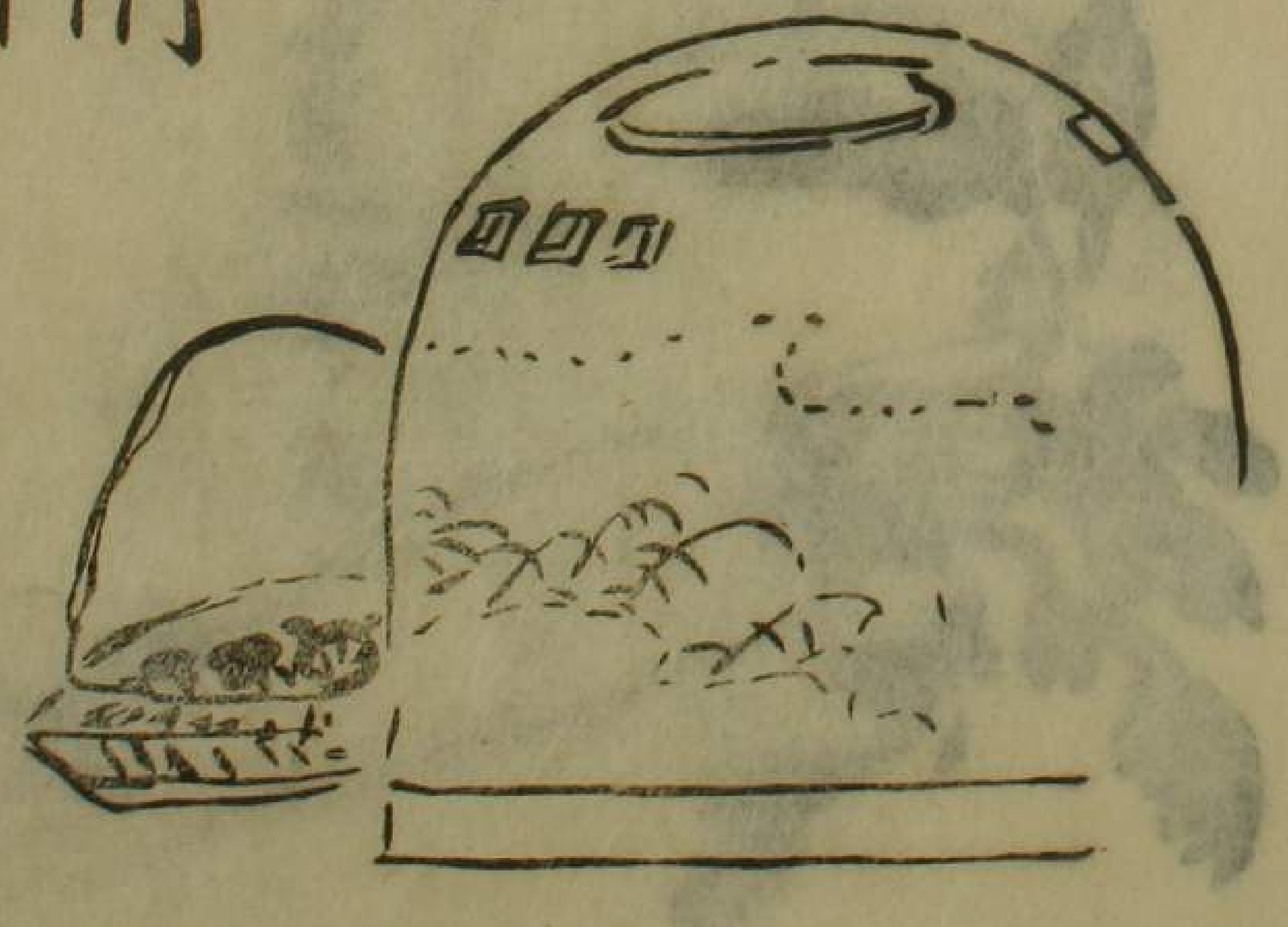
さも凉し花の匂ひもせみの聲

东浦

葉一峰画

よさちわは琴のちたましや桐火桶

起月



葉一峰画

ひきぬく根やいさぎよく洗ひて大根哉　柳枝

英一蝶画

いの日もくゝや　まするも猿の　ちゝ息　道悦

英一蝶画

粟畠
ゐるあ里
かいつる
野くハ

守都

学一筆画

寒念佛鼻
爾覺者無
理希黎
霜氵

学一筆画

雑子ミく
泪から出於
歎かな
向栄

英一蝶画

辻堂の
灯細う
蛍ハか絶
嘉遊

英一蝶画

八丈能　眠狐
縞尓はな咲
田乃菜
一京

蜑一筆画

田舎氣乃
晴かぬし
浅し
蓉
素十

蜑一筆画

羽ぶしやふ
何思ひ弱也
猿ゐの庵

指白

楽一筆画

若はの
さはゝく
うき
麦畑

東華

楽一筆画

さゝけうゑ　古貫

初子持
箒に
除ける

英一蜂画

取分て
網のまゝ美しき
鮎乃姿

英一蜂画

芝翫
香

役船も
筏にいふや
君乃葛

高平

英一蝶画

羽二重乃
肌也醍醐の
作り獨語

東月

英一蝶画

子ネヽの雨裡
宮居れし
きさめて
我ら年能至

蕙一筆画

蟷螂を
いまさ
おもひ出す
水ちちき

有信

蕙一筆画

達磨忌や
髭なる
男乃
髭赤し
平砂

英一蜂画

宇[illegible]女[illegible]
[illegible]遠[illegible]輪[illegible]
[illegible]踊の[illegible]

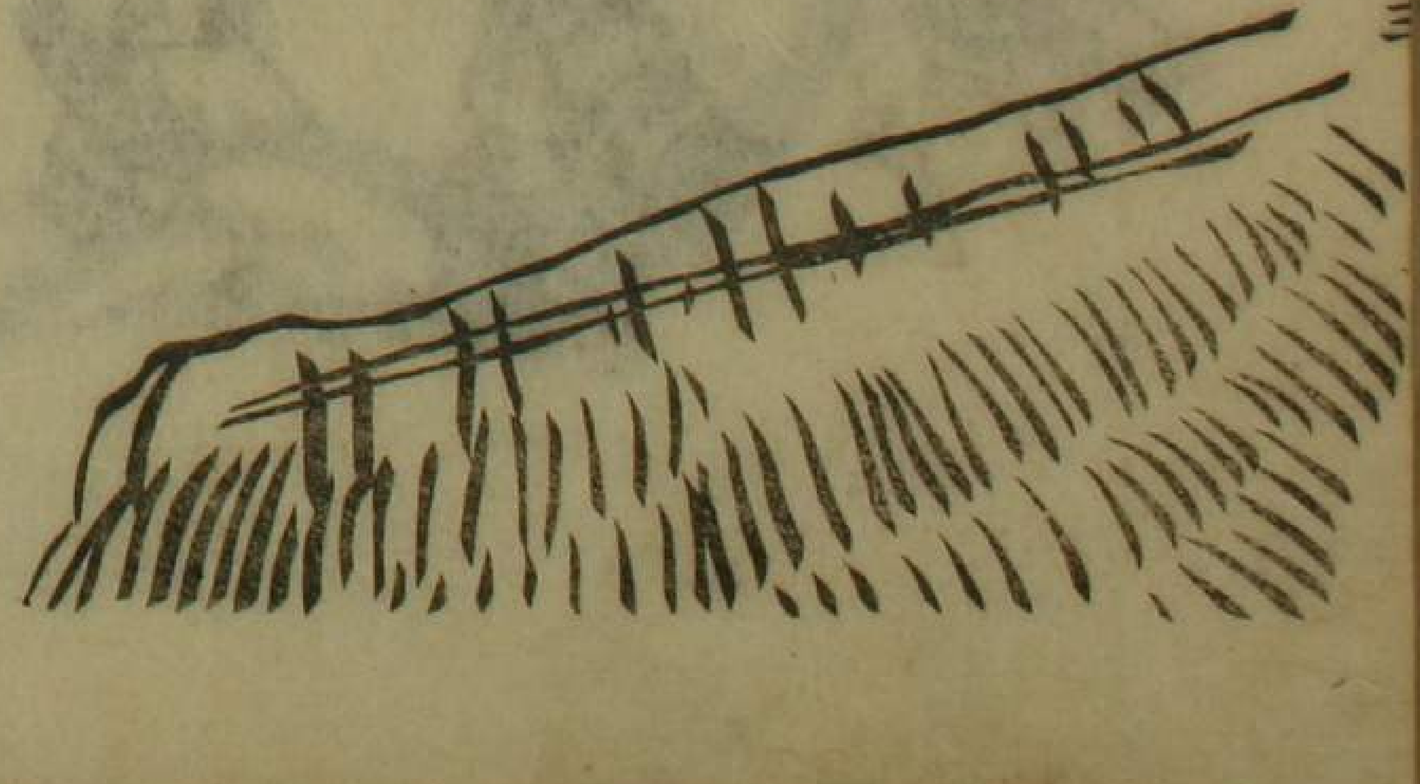
米仲

英一蜂画

蝙蝠の
出れは
月の出ん
宵哉

楽一筆画

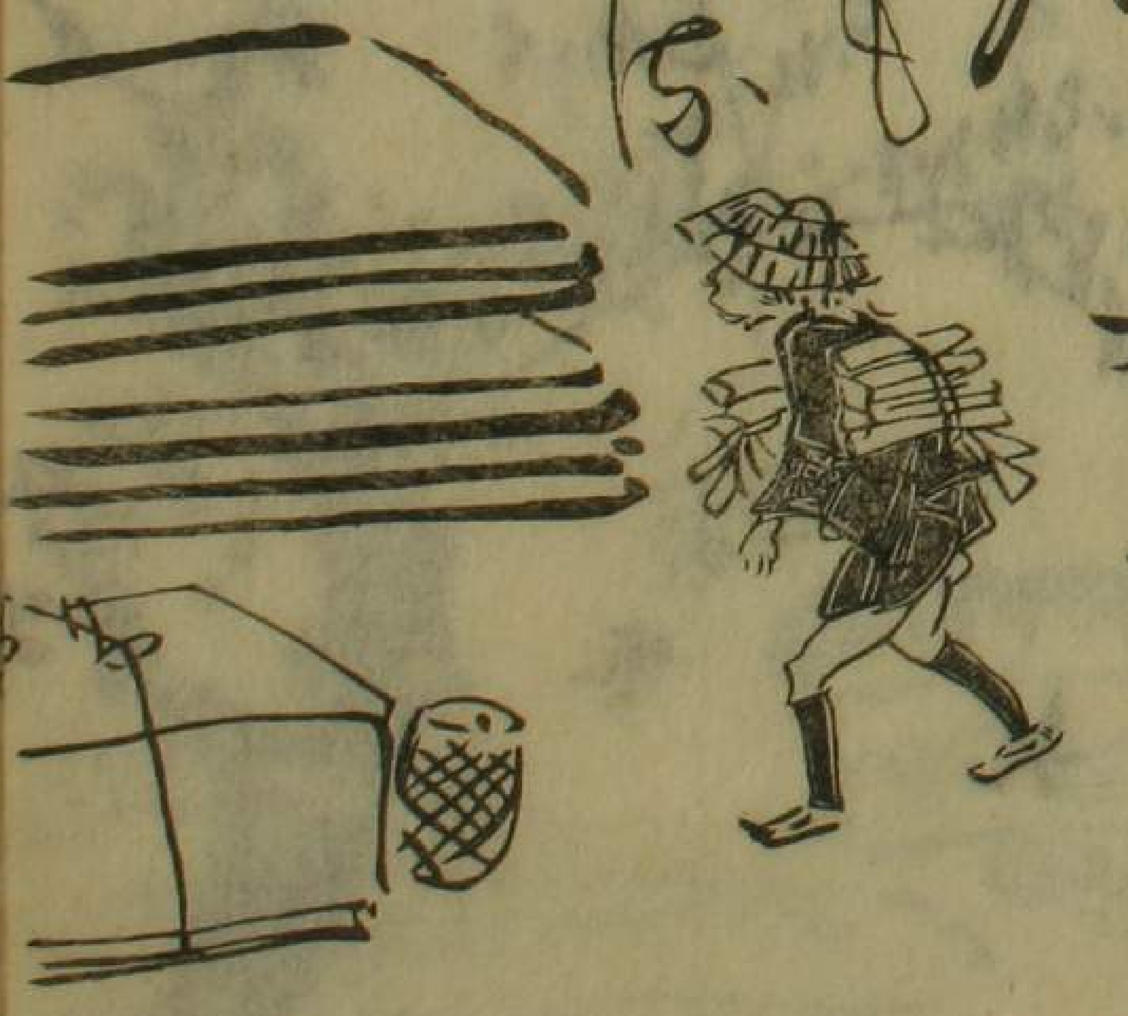
買明



煤はきや
空也の庵も
山に入る

楽一筆画

桂川



湖十

蜂の巣や又六の門乃簾

其一筆画

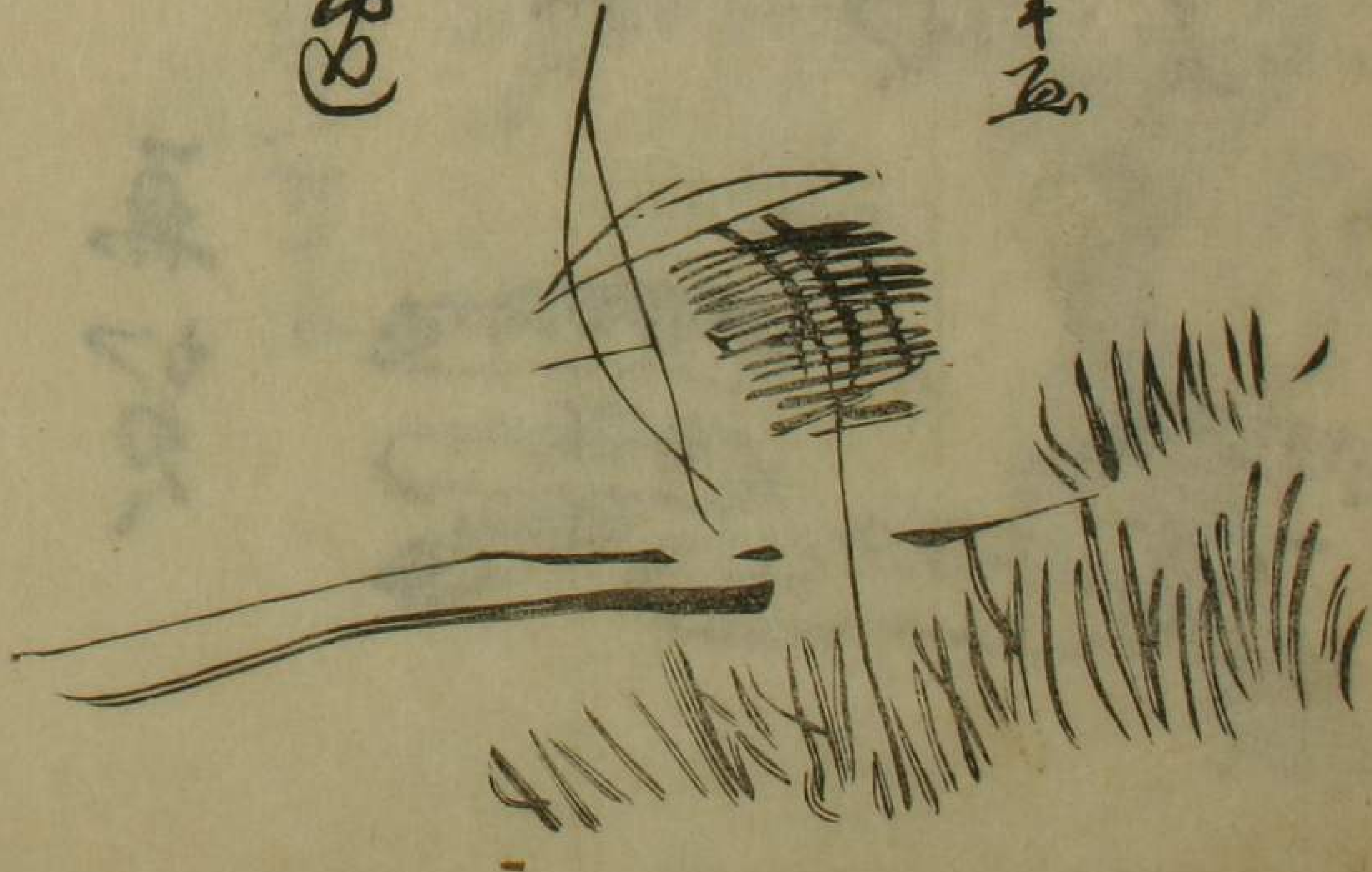
兼賀

行秋のみ海眠らむとす海風かな

其一筆画

笠と稲を
那いつし後たる
案山子の家
紀逸

英一蝶画

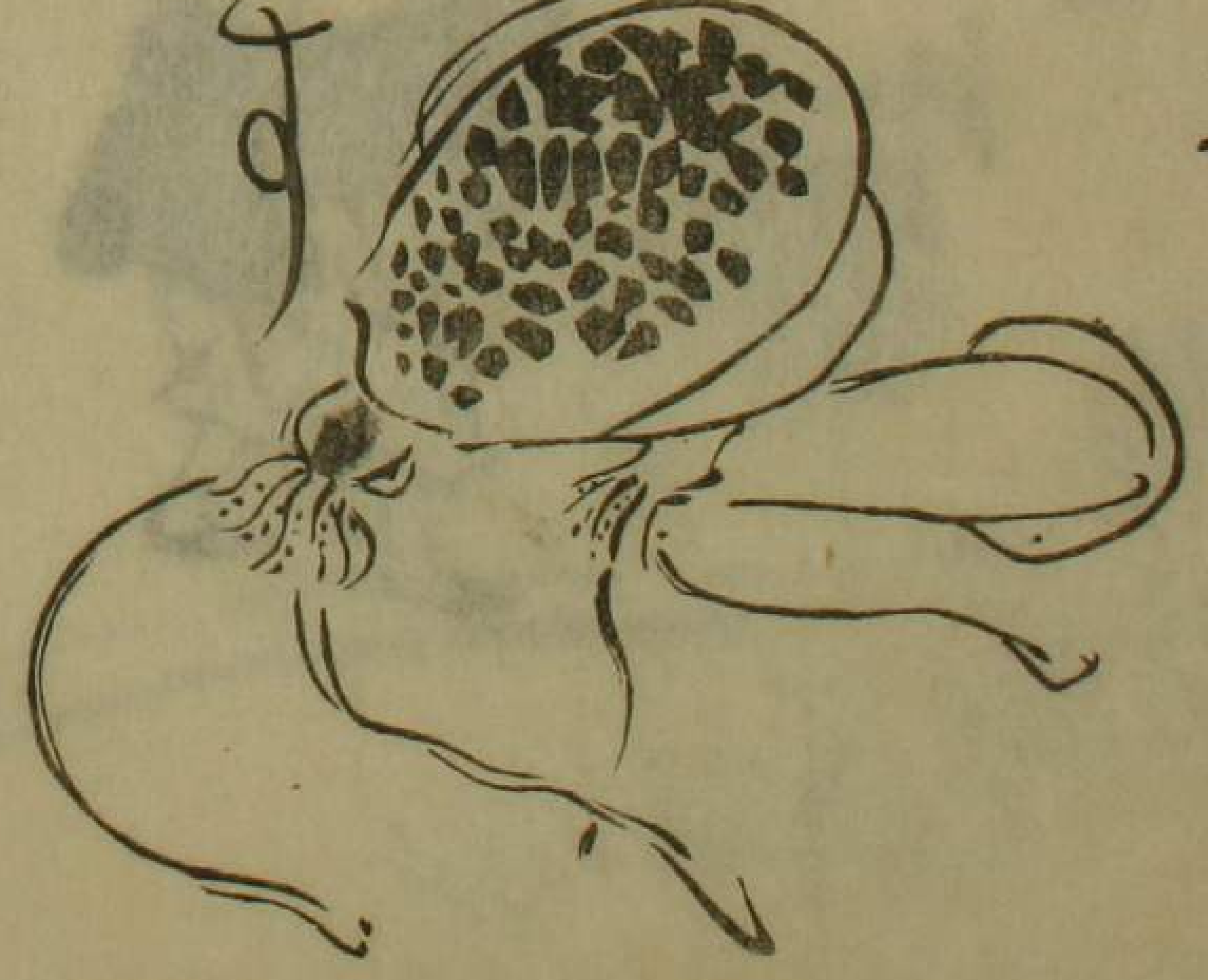


門脇乃姥や
たまへや傀儡師
珠来

英一蝶画

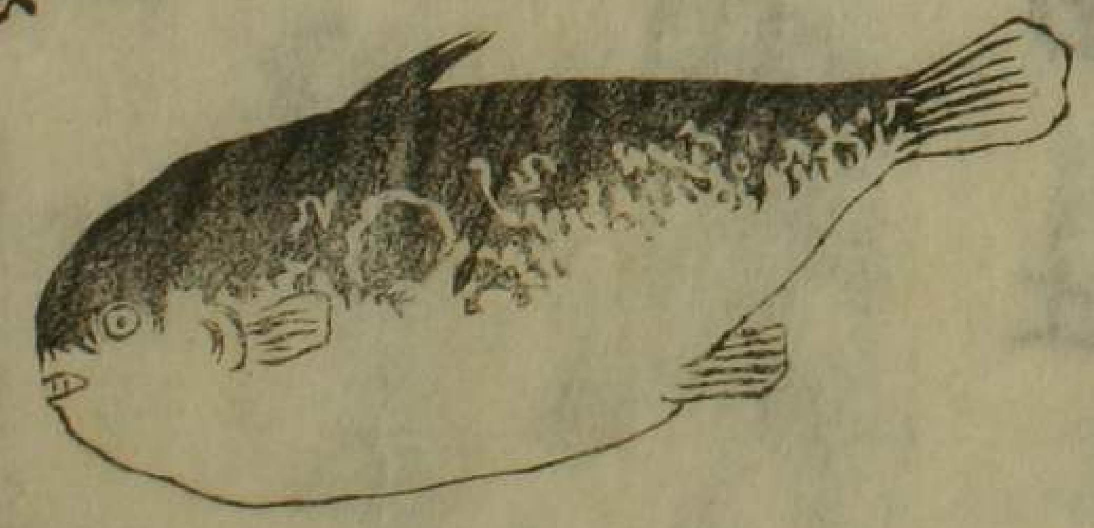
烏賊化して
手伝ゑ見へたる
老蛸かくす
玄門

葉一筆画



河豚の子も
親うをしろへ
游りけり
柳尾

葉一筆画



髪置や千代の芽出し此萌黄柄

英一蝶画

田社

梅　　　　扇裡

左
念頃のたしめや梅よ小盃

右
道清ましく人かつしや梅の里

花ゑに盆が波の事なえして人の心が
多解より出ゑしけるものおもや
右は山里が道のをはけなつかしみゆる
梢のさけめを点をとやせん
二つれも同じことにて

桜

左 百姓の庭へ折り来る山桜

右 山寺は[illegible]作る桜かな

[illegible]二三へ[illegible]咲に咲[illegible]庭の土の[illegible]山寺の[illegible]世[illegible]人[illegible]人の心[illegible]や

雉子

左 年寄は[illegible]雉子かな

右 雉子啼て何と[illegible]ても[illegible]

[illegible]

雛

左 門禮ハ余所がましきぞ雛祭

右 呼返されて名酒ぞ酔ふ雛祭

姫まつりとはいへとも雛のまつりを
寿きとける人をおもひ洗ひてと
左ハかしこかてをも女をらしや
小娘の人目をはゞかるものして
酒にも出る雛様子の
見えてまた情ある勝とす

若菜

左 百姓乃子ハ能育つ若菜哉

右 菜つみ如く出る時ばかり若菜哉

右ハ百姓の子ハやよく育つるいはれ
よき言葉のよせおもしろし
右合せて見るとしてもさもあるべきことと
情も出て見事なれども
なほきくしきを
若菜の摘てたるハせめ

五月雨

左 松風と池水も皆五月雨

右 流しり酒呑菖ね五月雨

空屋ハかゆるゝみにも
酒ハかへ置き
晴るゝしものやおかしも

暑

左 鳥も人指よ扇る暑さ哉

右 宿も寝て暑さも旅の空より

麹柴もあかぬよきハ暑けれとも
玉枕も夜寝にしき
おもしろき物にまかせ
いつれもしめして

持也

納涼

左
手紙先へおつま歩行や小日戸涼

右
白雲もうごけハ動く涼かな

称こハ涼ミを出の姿わかれ行
もやえをせんお雲の
秋すらし勝ち有と
申けるもかゝんと哉

相撲

左
帰りにハ刀ほしがる角力かな

右
松枝より登りてみるや村相撲

左形は浄人の生きすゝむる二
一趣ありて覚え由ぬなこの所
勝負持ときまり
為報事

暦

左
勝と勝なりまけてやゝ丁の声

右
初丁や江戸ハ東の土應し

左ハ古海まで出船か
並陸の海まて深のうみを
わりい合さんばかりに
江都の雲も幸ならば
勝ちを右ともあらず

月

左
照る月や汐に浮る魚の泡

右
吉原と座敷うつして月見かな

並
汐に照る月や
清明なるの高ねにと
掛巻もかしこき向ひには
かへりみるかな

紅葉

左

神の代と人代わかつや渡せ紅葉

右

趙汲馬と廉とや村紅葉

左ハ貫之にかよる

右ハ趙高かもと手なり

和漢奇異ははあれとものこと

おと夢河のいさかれる

心ともえ本よくはしれと

雪

左

吉川雪や板屋に音きく夜の声

右

美人の膝かりして雪見哉

両ハともに板屋の雪きゝしれて

ふ破ともいさゝか婦人めいたるや

婦人の絶景を河に美人のさしれ

いとう揚し

かゝん勝

枯野

左
痩馬れ古塚めく次枯野かれ

右
畏や住む枯野の末れひとつ家

痩馬古塚と枯野をさかしまにけるに
右ハこ枯野の末に住て侍るる
すさまし(め)きぬるゆゑ左ハ勝ちとし侍るを
人の中には枯野をいづれか勝と定めけん
桜䑓

年市

左
いくかの江戸入は知らで雑煮売

右
頭巾見て女と行や年の市

市人の留守やこの年の市
おとなしき勝ちとして
いつれ留けしよしと
よろこふべきとて右を
勝ちとしける

右四時十五へうたの佳吟各を右と
生いかちて詞花へてよと編ず切し
いなを宗とすいかに思聞かさるへかまず
當雅道と業子備ふるへ

慈鏡庵湖中